

極限定理

大数の法則・中心極限定理・少数の法則

村田 昇

2020.05.29

基本事項の復習

確率変数

- 乱数の数学モデル: 値がランダムに決定される変数
- 任意の区間 $[a, b]$ に含まれる確率が定められている (数学的には厳密性を欠くが, 本講義ではこの定義)
- 確率変数 X が区間 $[a, b]$ ($a \leq b$) に含まれる確率

$$P(a \leq X \leq b)$$

(特に $a = b$ のとき $P(X = a)$ と書く)

- 本章では有限個の値のみをとる確率変数を考える (無限個の値, 特に連続的な値については次回以降)

平均と分散

- 確率変数 X の取りうる値が有限個: x_1, x_2, \dots, x_N
- **平均** もしくは **期待値**

$$\mathbb{E}[X] := \sum_{i=1}^N x_i P(X = x_i)$$

- **分散** (= 標準偏差²)

$$\text{Var}(X) := \mathbb{E}[(X - \mathbb{E}[X])^2] = \mathbb{E}[X^2] - \mathbb{E}[X]^2$$

例題

- 問題

確率変数 X は偶数の出る確率が奇数の2倍のサイコロの目を表すとする.

$$P(X = 1) = P(X = 3) = P(X = 5) = 1/9$$

$$P(X = 2) = P(X = 4) = P(X = 6) = 2/9$$

このとき X の平均と分散を求めよ.

- 解答 (計算例)

X の平均は

$$\mathbb{E}[X] = \sum_{x=1}^6 xP(X=x) = 11/3 = 3.6666\dots$$

X の分散は

$$\begin{aligned}\mathbb{E}[X^2] &= \sum_{x=1}^6 x^2P(X=x) = 49/3 \\ \text{Var}(X) &= 49/3 - 121/9 = 26/9 = 2.88\dots\end{aligned}$$

- 解答 (R での計算例)

```
p <- rep(c(1/9,2/9),3) # 確率の値 (1/9 と 2/9 を交互に 3 回繰り返す)
x <- 1:6 # サイコロの目の値
(mu <- sum(x*p)) # 平均値の計算
(var <- sum((x-mu)^2*p)) # 分散の計算
sqrt(var) # 標準偏差
```

```
[1] 3.666667
```

```
[1] 2.888889
```

```
[1] 1.699673
```

独立性と同分布性

同時分布

- 観測データは確率変数の集合
- 確率変数の列 X_1, X_2, \dots, X_n に対する考察が重要
- 定義

“ X_1 が x_1 という値をとり、 X_2 が x_2 という値をとり、 \dots 、 X_n が x_n という値をとる”
という事象が起きる確率を**同時分布**という

$$P(X_1 = x_1, X_2 = x_2, \dots, X_n = x_n)$$

独立性

- 無関係にサンプリングされた観測データの性質
- 定義

確率変数列 X_1, X_2, \dots, X_n が**独立**であるとは、任意の n 個の実数 x_1, x_2, \dots, x_n に対して

$$\begin{aligned}P(X_1 = x_1, X_2 = x_2, \dots, X_n = x_n) \\ = P(X_1 = x_1) \cdot P(X_2 = x_2) \cdots P(X_n = x_n)\end{aligned}$$

が成り立つことをいう

同分布性

- 同一の法則に従って生成された観測データの性質
- 定義

確率変数列 X_1, X_2, \dots, X_n が**同分布**であるとは、任意の実数 x に対して

$$P(X_1 = x) = P(X_2 = x) = \cdots = P(X_n = x)$$

が成り立つことをいう

独立同分布性

- 一般に分析対象のデータには**独立性**と**同分布性**が同時に仮定される
- 定義
独立かつ同分布な確率変数列を**独立同分布**もしくは**i.i.d.**であるという
(i.i.d. は independent and identically distributed の略)

大数の法則

大数の法則の概要

- 同一の法則に従って生成された集団から**ランダムな**観測を多数繰り返すと、**観測値の平均**は**真の平均値**に近づく
- 具体的な例:
 - 歪みの無いコインの表が出た回数の割合
 - 視聴率の調査
- この法則を数学的に定式化した定理が**大数の法則**

無限列の独立性与同分布性

- 無限列に対しては任意の部分列について考える
- 独立性
 X_1, X_2, \dots が**独立**であるとは、任意の正整数 n に対して X_1, X_2, \dots, X_n が独立であることをいう
- 同分布性
 X_1, X_2, \dots が**同分布**であるとは、任意の正整数 n に対して X_1, X_2, \dots, X_n が同分布であることをいう
- 独立同分布性
 X_1, X_2, \dots が**独立同分布**もしくは**i.i.d.**であるとは、 X_1, X_2, \dots が独立かつ同分布であることをいう

大数の強法則

- 定理
 X_1, X_2, \dots を独立同分布な確率変数列とし、その平均を μ とする。このとき、 X_1, \dots, X_n の標本平均

$$\bar{X}_n := \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$$

が $n \rightarrow \infty$ のとき μ に収束する確率は1である。
これを“ \bar{X}_n は $n \rightarrow \infty$ のとき μ に**概収束**する”という。

演習

練習問題

- 大数の法則の数値実験を行いなさい。
 - 乱数のシード値・出現確率の変更・乱数の変更などを行っても大数の法則が成立することを確認しなさい。
 - サンプル数の増減によって精度がどの程度変わるか観察しなさい。

中心極限定理

中心極限定理の概要

- 大数の法則の主張:
 - n を大きくすると標本平均 \bar{X}_n は真の平均 μ に近づく
 - 推定誤差 $\bar{X}_n - \mu$ は n を大きくすると 0 に近づく
 - どの程度の大きさになるのか定量的な評価は与えていない
- 誤差の評価の定量化:
 - 推定誤差がある区間 $[\alpha, \beta]$ に入る確率で定量的に評価可能
$$P(\alpha \leq \bar{X}_n - \mu \leq \beta)$$
 - 上式の正確な計算は一般には困難
- サンプル数が大きい場合の定量的な評価の近似方法を述べたのが **中心極限定理**

中心極限定理

- 定理
 X_1, X_2, \dots を独立同分布な確率変数列とし、その平均を μ 、標準偏差を σ とする。このとき、すべての実数 $a < b$ に対して

$$P\left(a \leq \frac{\sqrt{n}(\bar{X}_n - \mu)}{\sigma} \leq b\right) \rightarrow \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_a^b e^{-\frac{x^2}{2}} dx \quad (n \rightarrow \infty)$$

が成り立つ。

中心極限定理の意味

- X_i の分布が何であっても、サンプル数 n が十分大きければ、標本平均と真の平均の差 $\bar{X}_n - \mu$ の分布は、**標準正規分布**

$$P\left(a \frac{\sigma}{\sqrt{n}} \leq \bar{X}_n - \mu \leq b \frac{\sigma}{\sqrt{n}}\right) \simeq \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \int_a^b e^{-\frac{x^2}{2}} dx$$

で近似できる

- 被積分関数 $\phi(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{x^2}{2}}$ を **標準正規密度** という

数値実験の設計

- $\sqrt{n}(\bar{X}_n - \mu)/\sigma$ の分布と標準正規分布を比較する
- 中心極限定理が正しければ、十分小さいビン $[a, b]$ におけるヒストグラムの高さは $\phi(a)$ で近似できる
- $\sqrt{n}(\bar{X}_n - \mu)/\sigma$ のヒストグラムに標準正規密度 $\phi(x)$ を重ね書きすることで近似の度合いを評価できる
- 密度表示は `hist()` で `freq=FALSE` に指定する
- 標準正規密度 $\phi(x)$ は `dnorm()` で計算する

演習

練習問題

- 中心極限定理の数値実験を行いなさい。
 - 乱数のシード値・出現確率の変更・乱数の変更などを行っても中心極限定理が成立することを確認しなさい。
 - サンプル数の増減によって精度がどの程度変わるか観察しなさい。

少数の法則

少数の法則の概要

- 滅多に起きない事が起こる回数に関する法則
- 典型的な例:
 - ある製品の不良品率 p はとても小さいとする
 - 一日に n 個 (非常に多数とする) 生産するとき, 不良品は平均的には $\lambda = np$ 個発生するが, 日によって不良品の個数 S_n には多少のばらつきが生じる
 - 個数 S_n は確率変数であるが, S_n がとる値の確率法則は強度 λ の **Poisson 分布** で近似できることが知られている
- これを正確に述べたのが **少数の法則**

少数の法則

- 定理

X_1, X_2, \dots, X_n を独立な確率変数列とし, 各 $i = 1, 2, \dots, n$ について X_i は確率 $p_{n,i}$ で 1 を, 確率 $1 - p_{n,i}$ で 0 をとるとする:

$$\begin{aligned}P(X_i = 1) &= p_{n,i}, \\P(X_i = 0) &= 1 - p_{n,i} \quad (i = 1, 2, \dots, n).\end{aligned}$$

このときある正の実数 λ が存在して, $n \rightarrow \infty$ のとき

$$\max_{i=1,2,\dots,n} p_{n,i} \rightarrow 0, \quad \sum_{i=1}^n p_{n,i} \rightarrow \lambda$$

ならば, 任意の整数 $k \geq 0$ に対して以下が成り立つ:

$$P\left(\sum_{i=1}^n X_i = k\right) \rightarrow e^{-\lambda} \frac{\lambda^k}{k!} \quad (n \rightarrow \infty).$$

補足

- 確率変数の取りうる値が 0 以上の整数全体で, 値が整数 $k \geq 0$ となる確率が

$$e^{-\lambda} \frac{\lambda^k}{k!}$$

で与えられるものを, 強度 λ の **Poisson 型確率変数**, その確率法則を強度 λ の Poisson 分布と呼ぶ

- 定理の $\sum_{i=1}^n X_i$ が不良品の例の S_n に対応する
- Poisson 分布の確率の値は `dpois()` で計算できる

演習

練習問題

- 少数の法則の数値実験を行いなさい.
 - 乱数のシード値を変更しても少数の法則が成立することを確認しなさい.
 - パラメータ n, p の変更によって結果がどのように変わるか観察せよ.

補遺

重複対数の法則

- 定理

X_1, X_2, \dots を独立同分布な確率変数列とし, その平均を μ , 標準偏差を σ とする. このとき

$$\limsup_{n \rightarrow \infty} \frac{\sqrt{n}(\bar{X}_n - \mu)}{\sqrt{2\sigma^2 \log \log n}} = 1 \quad \text{a.s.},$$
$$\liminf_{n \rightarrow \infty} \frac{\sqrt{n}(\bar{X}_n - \mu)}{\sqrt{2\sigma^2 \log \log n}} = -1 \quad \text{a.s.}$$

が成り立つ.

Hartman-Wintner の定理

- 定理

前定理の条件のもと, 列

$$\left(\frac{\sqrt{n}(\bar{X}_n - \mu)}{\sqrt{2\sigma^2 \log \log n}} \right)_{n=3}^{\infty}$$

のある部分列の収束先となるような実数全体の集合を C とすると, C が閉区間 $[-1, 1]$ に一致する確率は 1 である.